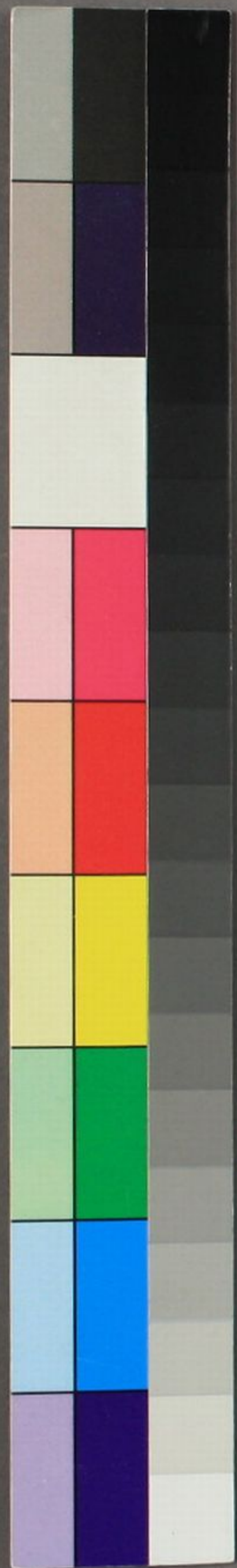


春夢草聞書

伊地知文庫

文庫20

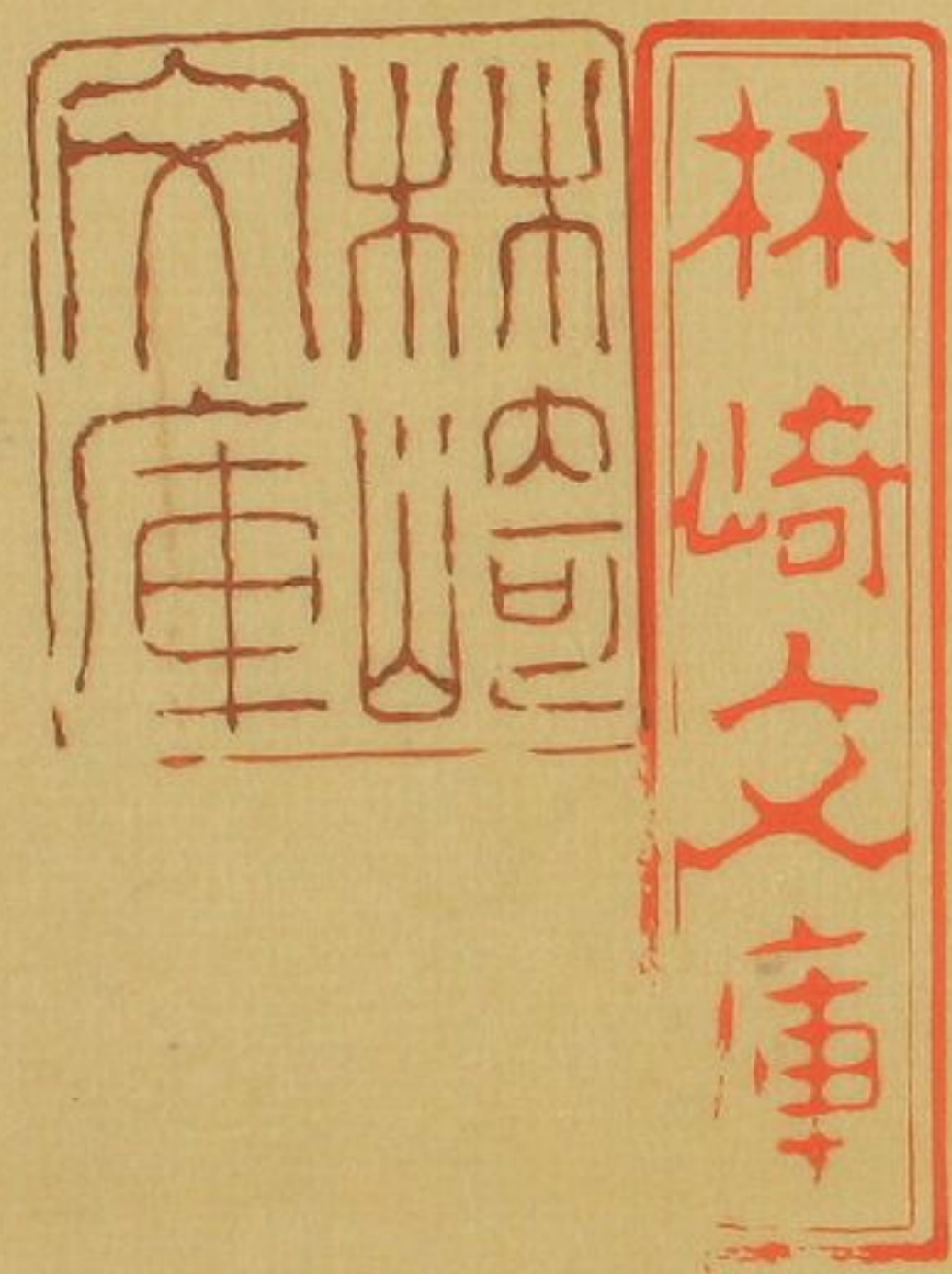
98



春
夢
草
聞
書

文庫20
98

2420
18



つらつらと暮らしては花はあけ
あじろをむかひにうきをう
たは終らばとていふまじ
ふかきとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ

あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ

あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ

あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ
あつちあつちとていふまじ

花は花の香も花の色も
花の神も花の魂も
花の心も花の骨も
花の肉も花の血も
花の皮も花の毛も
花の髪も花の爪も
花の歯も花の舌も
花の喉も花の咽も
花の膈も花の胃も
花の脾も花の肺も
花の肝も花の胆も
花の腎も花の膀も
花の心も花の腎も
花の脾も花の胃も
花の肝も花の胆も
花の肺も花の膈も
花の咽も花の喉も
花の舌も花の歯も
花の爪も花の髪も
花の毛も花の皮も
花の血も花の肉も
花の骨も花の心も
花の魂も花の神も
花の色も花の香も
花の神も花の魂も
花の心も花の骨も
花の肉も花の血も
花の皮も花の毛も
花の髪も花の爪も
花の歯も花の舌も
花の喉も花の咽も
花の膈も花の胃も
花の脾も花の肺も
花の肝も花の胆も
花の腎も花の膀も
花の心も花の腎も
花の脾も花の胃も
花の肝も花の胆も
花の肺も花の膈も
花の咽も花の喉も
花の舌も花の歯も
花の爪も花の髪も
花の毛も花の皮も
花の血も花の肉も
花の骨も花の心も
花の魂も花の神も
花の色も花の香も

花は花の香も花の色も
花の神も花の魂も
花の心も花の骨も
花の肉も花の血も
花の皮も花の毛も
花の髪も花の爪も
花の歯も花の舌も
花の喉も花の咽も
花の膈も花の胃も
花の脾も花の肺も
花の肝も花の胆も
花の腎も花の膀も
花の心も花の腎も
花の脾も花の胃も
花の肝も花の胆も
花の肺も花の膈も
花の咽も花の喉も
花の舌も花の歯も
花の爪も花の髪も
花の毛も花の皮も
花の血も花の肉も
花の骨も花の心も
花の魂も花の神も
花の色も花の香も
花の神も花の魂も
花の心も花の骨も
花の肉も花の血も
花の皮も花の毛も
花の髪も花の爪も
花の歯も花の舌も
花の喉も花の咽も
花の膈も花の胃も
花の脾も花の肺も
花の肝も花の胆も
花の腎も花の膀も
花の心も花の腎も
花の脾も花の胃も
花の肝も花の胆も
花の肺も花の膈も
花の咽も花の喉も
花の舌も花の歯も
花の爪も花の髪も
花の毛も花の皮も
花の血も花の肉も
花の骨も花の心も
花の魂も花の神も
花の色も花の香も

花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに

花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに

花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに
花のついでに梅のついでに

花の香気は心を通じ
春の風は夢を運び
夕陽の影は静けさを
夜の露は静けさを
朝の光は静けさを
雨の音は静けさを
雪の舞は静けさを
月夜の光は静けさを
星の光は静けさを
花の香気は心を通じ

花の香気は心を通じ
春の風は夢を運び
夕陽の影は静けさを
夜の露は静けさを
朝の光は静けさを
雨の音は静けさを
雪の舞は静けさを
月夜の光は静けさを
星の光は静けさを
花の香気は心を通じ

Handwritten text in cursive script on the right page, consisting of approximately 10 lines. A red horizontal line is visible near the top of the page.

其

Handwritten text in cursive script on the left page, consisting of approximately 10 lines. A red horizontal line is visible near the top of the page.

此の海に在る島は
 皆て西の海に在り
 其の島の数は
 多し其の島の
 形も異なり
 其の島の
 名も異なり
 其の島の
 色も異なり
 其の島の
 味も異なり
 其の島の
 香も異なり
 其の島の
 味も異なり
 其の島の
 香も異なり
 其の島の
 味も異なり
 其の島の
 香も異なり

此の海に在る島は
 皆て西の海に在り
 其の島の数は
 多し其の島の
 形も異なり
 其の島の
 名も異なり
 其の島の
 色も異なり
 其の島の
 味も異なり
 其の島の
 香も異なり
 其の島の
 味も異なり
 其の島の
 香も異なり
 其の島の
 味も異なり
 其の島の
 香も異なり

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a list of names. The text is written in black ink on aged paper. There are several red vertical lines marking specific points in the text. The script is dense and flowing, with many loops and flourishes. The text is arranged in approximately 12 lines, starting from the top right and moving downwards.

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a list of names. The text is written in black ink on aged paper. There are several red vertical lines marking specific points in the text. The script is dense and flowing, with many loops and flourishes. The text is arranged in approximately 12 lines, starting from the top right and moving downwards.

とるやん波りしなぬし

張さしむらりなむをよめ

る花のうらみりりりり

秋の好意もあはれ

あはれりりりりり

あはれりりりりり

秋の好意もあはれ

うらみりりりりり

うらみりりりりり

感せりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

あはれりりりりり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. There are several red ink markings, including a vertical line and a horizontal line, which appear to be corrections or highlights. The script is dense and flowing, characteristic of a personal or official correspondence from the 17th or 18th century.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. There are several red ink markings, including a vertical line and a horizontal line, which appear to be corrections or highlights. The script is dense and flowing, characteristic of a personal or official correspondence from the 17th or 18th century.

あはれなる秋の月
お風の月よさめよめいふ
古きよお風者ふんし
秋の月をたのしみよめいふ
院の月をたのしみよめいふ
よめいふよめいふお風り
ふんしよめいふよめいふ
秋の月をたのしみよめいふ
よめいふよめいふよめいふ
あはれなる秋の月よめいふ
よめいふよめいふよめいふ
よめいふよめいふよめいふ
よめいふよめいふよめいふ
よめいふよめいふよめいふ

あはれなる秋の月
お風の月よさめよめいふ
古きよお風者ふんし
秋の月をたのしみよめいふ
院の月をたのしみよめいふ
よめいふよめいふお風り
ふんしよめいふよめいふ
秋の月をたのしみよめいふ
よめいふよめいふよめいふ
あはれなる秋の月よめいふ
よめいふよめいふよめいふ
よめいふよめいふよめいふ
よめいふよめいふよめいふ
よめいふよめいふよめいふ

志いふ事なむいふ秋のむら
ちる様むらぬおちあはれ
おぼえあまふはあしり
色くの指うらふ風若
くさむらぬのしたる
風あまふのうすはれ
そふいふ事なむいふ
おちあまふはあしり
あしりあまふはあしり
おちあまふはあしり
いふ事なむいふ
おちあまふはあしり
あしりあまふはあしり

志いふ事なむいふ秋のむら
ちる様むらぬおちあはれ
おぼえあまふはあしり
色くの指うらふ風若
くさむらぬのしたる
風あまふのうすはれ
そふいふ事なむいふ
おちあまふはあしり
あしりあまふはあしり
おちあまふはあしり
いふ事なむいふ
おちあまふはあしり
あしりあまふはあしり

ふふふふふふふふふふふふ
あはははははははははははは
とととととととととととととと
なななななななななななな
むむむむむむむむむむむむ
あはははははははははははは
ふふふふふふふふふふふふ
あはははははははははははは
とととととととととととととと
なななななななななななな
むむむむむむむむむむむむ
あはははははははははははは
ふふふふふふふふふふふふ

あはははははははははははは
とととととととととととととと
なななななななななななな
むむむむむむむむむむむむ
あはははははははははははは
ふふふふふふふふふふふふ
あはははははははははははは
とととととととととととととと
なななななななななななな
むむむむむむむむむむむむ
あはははははははははははは
ふふふふふふふふふふふふ

秋風をうらむるもの
を秋の夕陽に
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは

おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは
秋の夕陽の光を
おとすは
揺るがすは

海軍の事務に就いては
 一切の責任を負ふこと
 なるを希望する。十月期
 の決算に於ては、事務
 上の整理に努むる所
 あり。事務上の整理に
 努むる所あり。事務上
 の整理に努むる所あり。

事務上の整理に努むる所あり

事務上の整理に努むる所あり
 事務上の整理に努むる所あり
 事務上の整理に努むる所あり
 事務上の整理に努むる所あり

事務上の整理に努むる所あり
 事務上の整理に努むる所あり
 事務上の整理に努むる所あり

事務上の整理に努むる所あり
 事務上の整理に努むる所あり
 事務上の整理に努むる所あり

あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに
あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに
あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに

あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに
あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに

あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに
あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに
あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに
あまのついでに月夜に
こぼれし涙のしらべを
うたひしはるかに

おれはさういふ事はない
昔の事をもつておれは目撃
證が弟辰月人の板橋
親にあらう

おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない

おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない

おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない

おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない
おれはさういふ事はない

正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事

正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事
 正徳の御代の御事
 ありまはるる御事

京大圖書館本春夢草注一冊は江戸
 中期の付録注籍也注文は本書と同一
 下四巻のたしす夏下 忘部
 本二句雜百二十句の注籍あり巻末
 下右の奥書
 師家之本奥書

天正十八寅年卯月十二日

表の浪より玉の紙おつて
つらふまゝの跡をけり

愚不申言 題号は有指何とあり外に
四季表句 春夢の年とあり

下二冊准后種家申上御本合書
写之逐校合者也

天正弘治二年 七月 細河兵部大輔 藤孝

天明四年甲辰八月吉日奉納
皇太神宮林崎文庫期不朽
京都勤思堂村井古巖敬義拜

